

# 高山恵子さん講演会

日時:7月21日(木) 18:30~20:00

会場:zoom 開催

題目:「自立に向けて準備したいこと」

対象:保護者向け

締切り:7月14日(木)締め切り

詳細は、伊那中央病院小児科 72-3121へお問い合わせください。



# なかよし作品展

上伊那小中学校特別支援学級・特別支援学校児童生徒作品展

期日:10月27日(木)~11月1日(火)

会場:いなっせ 2階ギャラリー

コロナにより、2年間お休みさせていただいた、なかよし作品展ですが、昨年度は場所を変え、伊那市創造館で行われました。

小中養護学校41校、697名の児童生徒の作品が並び、約

500名に来場いただきました。本年度は以前の会場に戻します。駅から近い環境で、さらに多くの方に鑑賞いただき、子どもたち自身の励みや一生懸命に頑張っている姿を知ってもらうため開催を計画しています。



# サマースクール

上伊那の「保育」・「歯科」・「医療」・「教育」・「福祉」が集い、それぞれの現状を話し、共通理解を深め、子どもの支援体制をつくる土台となる会です。

日時:7月30日(土) 8:50~12:20

形式:オンライン開催

詳細については、後日出されるサマースクールのパンフレットを参照ください。参加締め切りは7月14日です。また、質問等ございましたら、伊那養護学校地域連携支援室 72-2895にお問い合わせください。

# 特支研研修会

○第2回研修会 令和4年10月29日(土)AM 講師 原哲也先生(一般社団法人 WAKUWAKU PROJECT JAPAN 代表理事)

○第3回研修会 令和5年 1月28日(土)AM 講師 米沢好史先生(和歌山大学教育学部 心理学研究室教授)

詳細については、伊那養護学校地域連携支援室 72-2895にお問い合わせください。

## 講演者紹介

### 伊那養護学校支援室・パラノルディック HPD 渡辺 孝次 先生

教育においては、伊那養護学校の分教室の開設や伊那養護学校の児童生徒達のために、地域校への副学籍の設置に携わってきた。スポーツでは、松本盲学校に勤務していた時に生徒だった小林深雪選手と出会い、長野パラリンピックを共に目指し、バイアスロンで金メダルを獲得した。パラリンピックとしては、以後、4大会でコーチとして関わり、北京パラリンピックでは、パラノルディック監督として日本チームの金メダル獲得に貢献した。現在は、ハイパフォーマンスディレクターとして2026パラリンピック・コルチナ大会に向けた強化に関わっている。

## 多 様 性 と 調 和 ~二つの窓「特別支援とパラリンピック」から~

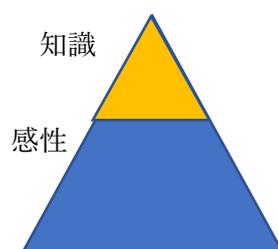
「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではない (レイチェルカーソン)

これは、伊那養護学校に以前勤められていた清水閣成先生(現南箕輪村教育長)から貰った言葉。「感じる」土台があって、その上に「知る」があるのではないか?

今日は、感じる部分の話にしたい。そうすれば、その上に乗る知識も広がってくると思う。感性が十分でない場合、人の知識は不安定になりかねない。

また、違う機会に聞いた話。「感性」のない「知識」は最後は核兵器ぐらいしかできない……

と。科学や技術の発達は人類最高の域に達していると思うけれど、それをどう使うかの感性がなければ、こんな結果になってしまう。それって、今の世界の状況そのものかなと思うんです。だから感性を育てることが大事なんだと思っています。



### 「北京オリンピック・パラリンピック」

今大会では、7個のメダルと41の入賞を「ノルディックチーム」「アルペンチーム」「スノボチーム」で勝ち取れた。中国では『0コロナ対応』をしていて、飛行場でも、移動のバス内でも、宿泊先でも毎日防護服を着た人からコロナの検査をされた。徹底していた。それだけ『0コロナ』を成功させたい想いも感じた。

日本のパラノルディックチームは、ここ数年の世界大会ではメダルが取れていなかった。一年前からの戦略で、湯ノ丸の2016mの高地にトレーニングコースを作ること、ワックスチームの充実、メダルターゲットを絞る等々により、川除大輝選手が金メダルを取ることができた。メダルは、オリンピックもパラリンピックも全く同じ物で、インクルーシブな大会であった。

ボランティアの方も素晴らしかった。ずっと笑顔で、誠心誠意サポートしてくれ、別れるときは双方に涙。「日本と中国」を超えて個人と個人が繋がっていけないのではないかと感じた。

### 「東京オリンピック・パラリンピック」



このエンブレムの意味。

~3つのことなる四角形は多様性を表しています。みんな違うから面白い。みんな違うけど繋がれる。互いに認め合い支え合いながらひとつになる時がやって来ます。同じ数、同じ形から作られる2つのエンブレム。それは、すべてが平等である証。障害の有無を超えて、あらゆる障壁を越えて、人と人がつながってゆきます~

この東京オリパラがコンセプトの一つとした多様性と調和・・・人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治、障害の有無などあらゆる面での違いを肯定し、自然に受け入れ、互いに認めあふことで社会は進歩していく。東京

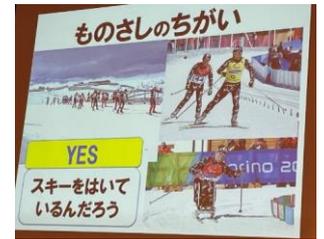
2020大会を世界中の人々が多様性と調和の重要性を改めて認識し、共生社会を育む契機となるような大会とする。というものだった。これってインクルーシブと同じ考え方だね？それが共生社会を作る基盤になっていく。

### 「物差しの違い」

障害者スポーツは助力を得て競技をするところがある。そのため、日本では一般の大会に参加できないことがあった。

ある年雪上合宿をニュージーランドで行った。その会場で国際スキー連盟 FIS の公認大会があった。ダメ元で「大会に参加できないか」と、たどたどしい英語で 30 分力説した。大会事務局は不思議な顔をしながら「with the ski?(スキー履いているんだろ)」「yes (勿論)」「no problem. join us (問題ない。おいでよ)」と。

スキーの大会だから、スキーを履いて走ればよかったのだ。物差しが違った。



### 「副学籍」「分教室」の意味とよさ

地元の保育園で一緒に生活していた子どもたちは、養護学校に来ることで、地元の学校での時間と居場所等から離れることになる。卒業後は、再び地域に帰り、共生社会で共に生きていこう!という教育システムである。ちょっと無理を感じる。

「成人式の案内状が養護学校の卒業生には届かない」ということもあった。中学校の卒業生名簿が成人式の案内状の元名簿となっていたため、とある市町村関係者から聞いた。籍を分けていることでの将来への影響はまだあるのかもしれない…。

保護者の願いから始まった「副学籍」制度。希望することで、地元の小中学校と連携して様々な交流活動が展開されるようになった。人生の区切りの時を地元の仲間と一緒に、地元校の卒業証書授与希望は年々増えていった。卒業生名簿にも名前が記される。何よりも生まれ育った地域の学校での存在感と仲間とのつながりが大事なんだと思う。時間と空間が「いっしょ」に在ったという事実が…。

『副学籍教室』という新たな展開も生まれている。飯島町の伊那養小学部の子どもたちは、毎週金曜日には地元の飯島小学校の副学籍教室に通う。そこで、地元の仲間と一緒に遊び、いっしょに給食を食べ、いっしょに運動会に参加する。日常の自然な「暮らし」がそこにはある。ある意味では「分教室」的でもある。このお互いの存在感が大人になってから生きてくる。

インクルーシブな空間と時間。「いっしょ」に生きる学校。この感性ある学校時代の経験が将来の共生を創る。

### 「パラの精神」～失われたモノを数えるな。今あるモノを最大限に生かせ～

パラノルディックのレジェンド。新田佳浩選手。過去3大会で金3・銀1・銅1を獲得している。彼は、三歳の時に左腕を失った。競技では自分にある右腕と両足を活かしてメダルを獲得した。失った左腕では勝負せず、右ストックワークと両スキーを滑らせ、本人の力が活かせる登りコースで勝負してきた。弱点強化ではなく、強みであり良さの強化である。

パラの精神は「その子にある良さを育てる」という特別支援教育の精神とも共通する。

良さを育てることが、その子の全体を伸ばしていく。そして、それぞれの良さが繋がってチームになれば、そこに共生社会ができる。そんな日が来るといいなと思う。

- |       |                                        |
|-------|----------------------------------------|
| おまけ   | ○究極の福祉とは？ ⇒ 今、隣の人に手を差し伸べられること。(中野 泰先生) |
| 感じた言葉 | ○なんで特別支援教育をするの？ ⇒ その子が幸せになるため。(高山恵子先生) |
|       | ○究極の特別支援とは？ ⇒ 目の前の子を笑顔にできること。          |